

「水辺のレジャーにおけるライフジャケットの着用と安全な使用」について



項目

- 1 水難者数等の統計及び水難事例
- 2 商品の種類と安全対策等
- 3 法令・規格・基準等
- 4 海外情報
- 5 業界団体等の取組
- 6 着用状況の実地調査結果
- 7 アンケート調査結果
- 8 検証実験結果
- 9 現状と課題
- 10 提言

協議会で実施した調査・実験（抜粋）

ライフジャケット着用率（都内10か所の水辺で観測）

3つの活動内容別に着用率をカウント

- ・水遊び、遊泳
- ・釣り（ボート上を除く）
- ・ボート（カヌーなど）

ライフジャケットの所有状況など（都民2,000人を対象）

- ・所有の有無（大人用／子供用）
- ・使用方法の認知度（締め付け不足で脱げる等）
- ・改善してほしい点 など

非着用時、不適切な使用時などの浮遊状況を比較

- ・ライフジャケットを「着ていない時」と「着ている時」
- ・各種ベルトを「適切に締め付けた場合」と「緩めた場合」
- ・サイズが「適切なもの」と「過大なもの」
- ・浮力体が「正常なもの」と「潰れたもの」



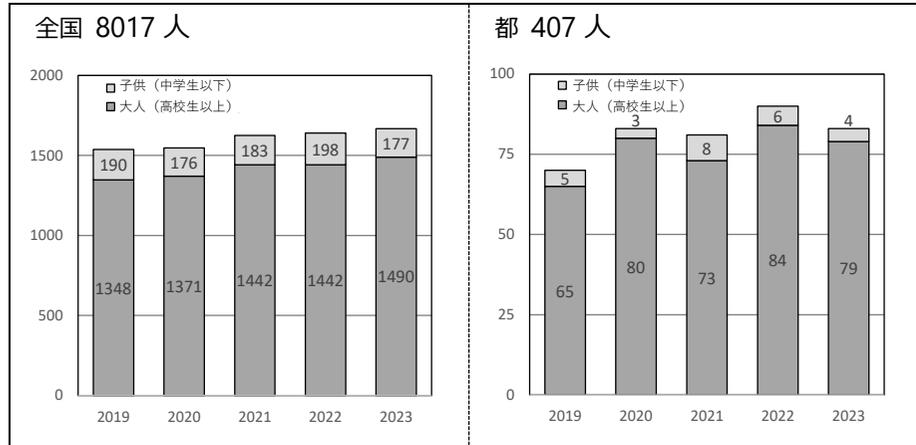
＜協議会での検討対象＞ 水辺のレジャーでの使用が多い固型式(浮力体に固型物を使用)のライフジャケット

※「ライフジャケット」とは、水上で呼吸可能な浮遊姿勢を保つために着用する上着型の浮き具であり、救命胴衣以外のもの(フローティングベスト等)も含む。

1 水難者数等の統計及び水難事例 (報告書 P.1～)

＜水難者数等の統計 (警察庁、海上保安庁の統計をもとに作成)＞

○水難者 (過去5年間、2019～2023年)



- ・おおむね横ばいで推移 (全国約 1600 人/年、東京都約 80 人/年)
- ・夏期に水難者が多い (7、8月の2か月間で、年間の約 1/3 が発生)
- ・死者・行方不明者の割合が高い (全国 45%、都 59%)

○ライフジャケット着用状況等

- ・海 (レジャーに伴う水難時、過去 10 年間、2014～2023 年)

水難者の着用率	釣り中 25.7%、遊泳中 4.2%、磯遊び中 1.8%
---------	------------------------------

なお、着用時の死者・行方不明者の割合は、非着用時に比べて低い。

- ・川、湖沼等

統計からは確認できず → 着用率を実地調査 (P.4 参照)

＜水難事例 (東京消防庁の救急搬送事例をもとに作成)＞

○水難に伴う救急搬送者数 (過去 5 年間、2019～2023 年)

東京消防庁管内 281 人

- ・重症度が高い人が多い (死亡又は重篤が全体の約 6 割)
- ・高齢者が多い (65 歳以上が全体の約 4 割、死亡・重篤の約 5 割)
- ・河川での発生が多い (全体の約 8 割)
- ・発生時の動作 (不明を除く) は陸からの転落等が最多、次いで遊泳中

〔レジャー中の水難による救急搬送者数〕 (カッコ内は死亡・重篤の人数)

レジャー中の水難と分かるもの (プールを除く、推測を含む) 35 (10)				
年齢	15 歳未満 10 (3)	15 歳以上 65 歳未満 19 (5)	65 歳以上 6 (2)	
場所 活動内容	川			海
	水遊び・遊泳	釣り	ボート遊び	その他
	24 (7)	5 (2)	4 (1)	1 (0)
				1 (0)

※ 該当する救急搬送者数であり、この数値は発生割合を示すものではない。

〔レジャー中の水難事例〕

＜川、水遊び・遊泳＞

友人 3 名で川遊びをしていた。内 2 名が川に潜った後上がってこないことに釣り人が気づき、通報した。(溺水者 2 名: 共に 10 歳代 (15 歳未満)・重篤)

＜川、水遊び・遊泳＞

河川敷に家族で遊びに来ていた。1 名が川に飛び込み溺れた。その 1 名を助けるために家族 2 名が川に入ったがその 2 名も溺れてしまった。(川に飛び込み溺れた者: 40 歳代・中等症、救助者 2 名: 30 歳代・重篤、40 歳代・重篤)

＜川、釣り＞

友人と川に入水し釣りをしていた。友人が流されたのを助けようとしたところ、自分も流され溺水。目撃者が救急要請した。(30 歳代・重篤)

＜川、ボート遊び＞

友人とボートで川を下っていた際に何らかの理由によりボートが転覆し、川の中に投げ出された。川の中の何かに引っかかっているところを先行していた友人が発見し、通報した。(70 歳代・死亡)

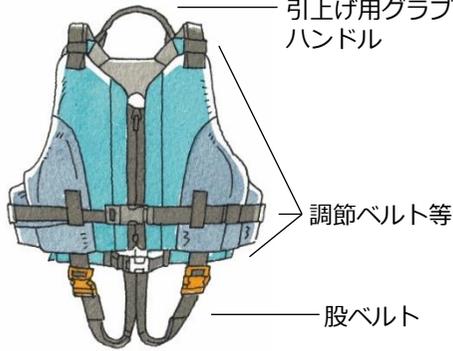
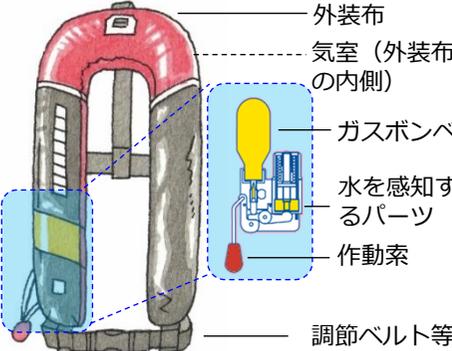
※ いずれの事例も、事故時のライフジャケット着用状況 (着用又は非着用) は不明であった。

2 商品の種類と安全対策等 (報告書 P.11~)

<ライフジャケットの種類>

ライフジャケットを浮力体の構造で分類すると、固型式、膨脹式、気体密封式、ハイブリット式の4種類がある。水辺のレジャー活動では、主に固型式と膨脹式が着用されている。

○固型式と膨脹式の特徴

固型式	膨脹式
	
様々な場所で使用可能 (岩場等での使用も問題ない)	使用に向かない場所あり (岩場等、気室に穴が空く恐れがある場所での使用に不向き)
膨脹式と比較して <ul style="list-style-type: none"> 動きにくい 夏に着ると暑い かさばる 点検が容易 常時水に入る活動に向いている 	固型式と比較して <ul style="list-style-type: none"> 動きやすい 夏に着ても涼しい コンパクト 点検が複雑 一度膨脹させるとガスポンベ等の交換が必要

イラスト出典 / 河川財団「水辺の安全ハンドブック」 Illustration / 山下 航 / マリンスポーツ財団「WEAR IT! ライフジャケット Q&A」

○固型式の形状等の特徴

大人用	子供用
<ul style="list-style-type: none"> 股ベルトが有るものと無いものがある フリーサイズのみとサイズが複数あるものがある 釣りやカヌー等、活動内容に合わせてデザインされた商品もあり 	<ul style="list-style-type: none"> 股ベルトが有るものが多い サイズが複数あるものが多い 枕型の頭部浮力補助(ピロー)が付いたものもあり

<性能基準>

水遊びなどで着用するライフジャケットに強制規格はない。

このため、水辺のレジャー活動に用いられるライフジャケットは、性能基準が有るものと無いものが混在している。

<商品の表示事項>

固型式ライフジャケット 15 商品の本体や添付書類などの表示内容を調査。

使用等に関する注意事項については、本体や添付書類に詳細な記載があるものがあつた一方、記載が一切ないものもあり、商品による差が大きかつた。

○使用等に関する表示内容 (15 商品)

項目	記載内容	表示のある商品
着用方法等	着用方法	9
	仕様 (パーツ、機能の説明)	9
	着用方法のイラスト	7
着用時の注意事項	股ベルトやファスナーを適切に着用すること	12
	着用前に破損や破れを含む不具合がないかを点検・確認すること	9
	自身のサイズにあつた製品を着用すること	7
	子供が着用する際の注意、子供が着用しないこと	7
	所有者以外が着用するには注意喚起をすること	2
その他の注意事項	マリウェア、ウエットパンツを着用すること	2
	使用用途、使用用途以外での使用をしないこと	11
	万が一の場合に備えて通信手段を確保すること (118 番、119 番への連絡)	5
	飲酒をしないこと	4
	安全を 100%保証することはできないこと	4
	体温低下、熱中症に注意すること	4
	化学繊維のアレルギ-について注意すること	3
	悪天候時には水辺から離れること	3
	股ベルトを首に掛けないこと	2
飛び込みをしないこと	1	

3 法令・規格・基準等 (報告書 P.25~)

<法令・規格・基準>

○着用義務等

- ・小型船舶乗船時を除くレジャーでは、ライフジャケットの着用義務はない。
- ・小型船舶の船室外の甲板上では、国の基準に適合した小型船舶用救命胴衣等の着用義務がある。また、小型船舶用救命胴衣等の性能要件は、法令等で規定されている。

○国内の主な規格・基準等

名称 (承認/鑑定/認定)	小型船舶用救命胴衣等の型式承認試験基準 (国土交通省)	レジャー用ライフジャケットの性能確認試験基準 (日本小型船舶検査機構)	RAC川育ライフジャケット認定規則 (川に学ぶ体験活動協議会)
マーク	 桜マーク	 性能鑑定済マーク (CSマーク)	 RAC川育ライフジャケット認定マーク
構造	固型式、膨脹式ほか	固型式のみ	固型式のみ
区分等	TYPE A~G : 船舶種類や航行区域等別 小児用 : 体重別	大人用 : L1~L3 使用目的や使用環境別 子供用 : LC1、LC2 体重別	大人用 : R1~R3 想定エリア別 子供用、乳児用 : 区分なし
浮力	小型船舶用救命胴衣 TYPE A~F : 7.5kg 以上 小型船舶用浮力補助具 TYPE G : 5.85kg 以上	大人用 L1 : 11.7 kg 以上 L2 : 7.5 kg 以上 L3 : 5.85kg 以上	大人用 R1 : 11.7 kg 以上 R2 : 7.5 kg 以上 R3 : 5.85kg 以上
	小児用 7.5kg 以上 (体重 40kg 以上) 5 kg 以上 (体重 15kg 以上 40kg 未満) 4 kg 以上 (体重 15kg 未満)	子供用 LC1 : 5kg 以上 (体重 15kg 以上 40kg 未満) LC2 : 4kg 以上 (体重 15kg 未満)	子供用、幼児用 4 kg 以上 幼児用は、頭部の浮力補助用のピローが背面首元に付属すること。
色	指定あり(TYPE A~C のみ)	指定なし	指定なし

<行政機関の取組>

○注意喚起、ライフジャケット着用促進の取組等

国土交通省

- ・ウェブページで小型船舶用のライフジャケットの種類や特徴、安全基準等を紹介。また、「河川水難事故防止ポータルサイト」で、川遊びでの着用推奨や Q&A 等を掲載。

海上保安庁

- ・ライフジャケットの着用体験会など海難防止に関する様々な啓発活動を実施。また、ウォーターアクティビティに関する総合安全情報サイトでは、ライフジャケットの種類、つけ方などをイラストや動画等で紹介。

東京都

- ・子供の事故防止に関する啓発誌内やウェブページ等で、水辺で遊ぶ際のライフジャケットの着用を推奨。また、平成 30 年度に「子供用ライフジャケット」について、アンケート調査や浮力試験等を実施。

4 海外情報 (報告書 P.45~)

○海外における状況、規格・基準等

- 対象 : アメリカ (ニューヨーク州)、イギリス、フランス、オーストラリア (ニューサウスウェールズ州) の 4 か国

<レジャー時のライフジャケット着用義務>

各国とも、主にカヌーやカヤックを含む船舶乗船時に着用義務あり。

- ※船舶の種類又はレジャーの内容等によって対象年齢や浮力基準が異なる。
- 乗船を伴わない水辺のレジャー (一部除く) は、着用義務は確認されず。

<規格・基準>

米国 : UL 12402、欧州 : EN ISO 12402、豪州 : AS 4758

いずれも ISO12402 をベースとした規格であることから、細かい諸条件に違いはあるものの、試験方法や要件に大きな差は見られなかった。

<着用の啓発>

各国とも、マリンレジャーや乗船時の安全対策としてライフジャケットの着用に関する安全啓発を行っている。ウェブでは、着用推奨理由、種類 (マークやレベル、各種機能等)、選び方等を情報発信している。

5 業界団体等の取組 (報告書 P.89～)

<製造事業者団体>

一般社団法人日本釣用品工業会

- ・釣用品メーカー等 120 社（ライフジャケットメーカーを含む）で構成されている。「信頼あるライフジャケットを着用しよう」とのメッセージを発信し、国土交通省型式承認品「桜マーク」と日本小型船舶検査機構性能鑑定適合品（レジャー用ライフジャケット固型式）「CS マーク」のライフジャケットの着用・点検などの普及啓発に、全国規模で取り組んでいる。
- ・ライフジャケットを取り扱っている会員企業 5 社で、ライフジャケット安全啓発ワーキンググループを定期的に開催している。

小型船舶関連事業協議会

- ・ライフジャケットを取り扱っている会員企業は 8 社で、救命具に関する事業を担当する部会（第 1・2 部会）を設置している。
- ・イベント等で膨脹式救命胴衣の無料点検実施やライフジャケットの貸与、ライフジャケットに関する説明会の開催などを行っている。

<規格・基準等適合確認機関>

日本小型船舶検査機構

- ・船舶に設置されるライフジャケットについては、船舶安全法に基づき、国土交通省が型式承認した小型船舶用救命胴衣等の量産品に対し同一性を確認する「検定」を行っているほか、平成 28 年度から任意の業務として法令に基づかないレジャー用のライフジャケットに対する「性能鑑定」を開始している。
- ・小型船舶に関する幅広いテーマについて様々な調査研究を行っており、ライフジャケットに関する調査研究も実施している。

NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会

- ・川での安全管理ができる指導者の育成などを行っているほか、平成 26 年に「川という自然環境下での体験活動に適したライフジャケット」の安全基準等に関するガイドラインを制定し、RAC 川育ライフジャケットの認定を行っている。
- ・平成 27 年度にライフジャケットの経年劣化に関する調査を実施している。

6 着用状況の実地調査結果 (報告書 P.95～)

<調査概要>

○調査場所

都内 10 か所

場所		特徴	
川	6 か所	流れあり	4 か所
		流れあまりなし	2 か所
湖	1 か所	流れあまりなし	1 か所
海	3 か所	砂浜（一部岩場等あり）	2 か所
		岩場（人工的な磯）	1 か所

○調査日

令和 6 年 5 月の連休、7 月の休日及び 8 月の休日（1 か所あたり 2 回観測）

<調査結果>

○観測者数

918 人（水遊び・遊泳 553 人、釣り 101 人、ボート 264 人）

○ライフジャケット着用率

活動内容		年齢層	
水遊び・遊泳 （釣り、ボート以外）	13.0%	一般（概ね中学生以上）	2.5%
		子供（概ね小学生以下）	21.3%
釣り （ボート上を除く）	7.9%	一般（概ね中学生以上）	8.9%
		子供（概ね小学生以下）	4.5%
ボート （カヌー、SUP*等）	90.9%	一般（概ね中学生以上）	90.4%
		子供（概ね小学生以下）	96.0%

* スタンドアップパドルボード：サーフボードのような大き目のボードの上に立ち、パドルを漕ぎ移動する水上のレジャー

[着用率の傾向]

- ・「ボート」では着用率が比較的高い。「水遊び・遊泳」、「釣り」では低い。
- ・「釣り」、「ボート」では、年齢層による着用率の違いはあまりない。
- ・「水遊び・遊泳」では、子供（概ね小学生以下）と比べ、一般（概ね中学生以上）の着用率が低い。

7 アンケート調査結果 (報告書 P.103~)

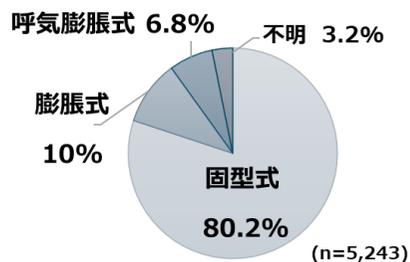
およそ過去5年間に、海、川、湖、池等の自然環境で水辺のレジャー活動[※]の経験がある18歳以上の都民2,000人 (※ライフジャケットの着用義務があるレジャーを除く)

<ライフジャケットの着用状況について>

・レジャー活動中にライフジャケットを着用した割合 56.4%

	着用が比較的多い	着用率が比較的小さい
活動内容	ボート遊び 釣り(陸上からを除く) シュノーケリング	釣り(陸上から) 魚とり 水辺活動・水遊び・遊泳
年齢層	子供(小学生以下)	大人(中学生以上)

・着用したライフジャケットの種類
固型式の着用が多く全体の約8割



・非着用理由

1	水深が浅く溺れる危険性がないから	34.6%
2	水中に転落したり、水に流されたりする危険性が少ないから	21.8%
3	ライフジャケットをもっていなかった、その場になかったから	20.1%

<着用時・非着用時の危害等経験について>

・着用時にライフジャケットの着用効果を感じた経験があった 18.1%

例:「流木に当たって落水した時に浮いて救助を待てた」、
「沖合に流された時に浮いて救助を待てた」など

・着用時に不具合があった 11.4%

例:「紐の締め付けが甘く脱げそうになった」、
「サイズが大きすぎて脱げそうになった」など

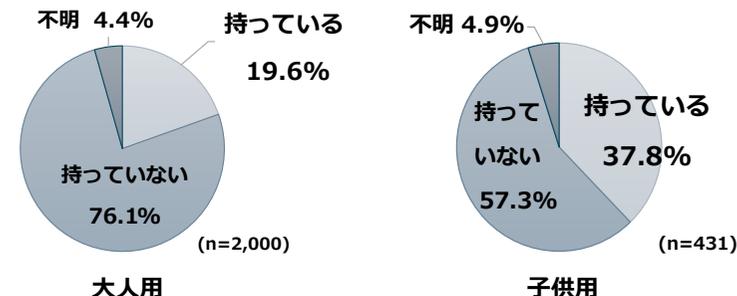
・非着用時に「溺れた、溺れそうになった、危険な経験」があった 2.2%

例:「子供が流されかけて助けに行った時に溺れかけた」、
「離岸流に流されて溺れた」など

<所有状況について>

・ライフジャケットの所有率

大人用の所有率が低い



・入手動機

上位2つ	理由	大人用	子供用
1	落水時、流された際などに溺れないため	33.0%	31.3%
2	水難事故のニュースを見聞きしたから	28.9%	36.2%

・非所持理由

上位2つ	理由	大人用	子供用
1	使用頻度が少ない	34.1%	30.0%
2	レンタルすればよい	31.7%	34.4%

<使用方法の認識等について>

・商品本体の注意事項や取扱説明書の確認

「全部読んだ」40% 「一部読んだ」30% 「読んでいない」14%

・点検などの使用前確認の頻度

「毎回」45.4% 「時々」35.5% 「確認していない」17.9%

・使用方法等の認知度

使用方法に関する内容の認知度は所有者、非所有者ともに低い。

サイズが大きかったりベルトの締め付けが緩いと、水中で脱げてしまう場合がある	所有者 36.4% 非所有者 24.2%
股ベルトがあるもので股ベルトを使用しないと、水中で脱げてしまう場合がある	所有者 29.9% 非所有者 12.3%
ライフジャケットの上に重いものを載せると、潰れて浮力が低下する恐れがある	所有者 23.1% 非所有者 6.8%

8 検証実験結果（報告書 P.162～）

<試験概要>

被験者を用いた浮遊試験を行い、各条件での浮遊状況を比較し、「ライフジャケットの着用効果」と「適切な使用の重要性」を検証した。

検 体：認証マーク等が付されている固型式ライフジャケット 6 製品
被験者：成人男性 / 水槽水質：淡水 / 浮遊姿勢：立位に近い姿勢

<ライフジャケットの着用効果>

○ライフジャケットを「着ていない時」と「着ている時」の比較

- ・立位に近い浮遊姿勢では、非着用時は口位置が水面下、着用時は水面上
 - ・着用時は、非着用時と比べて口元高さ（水面から口位置までの垂直距離）が高い
- ライフジャケットの着用は、着用者の顔面を水面上に支持できるため、落水時等の呼吸可能な浮遊姿勢の確保に有効

<適切な使用の重要性>

○各種ベルトを「適切に（きつめに）締め付けた場合」と「緩めた場合」の比較

- ・各種ベルトを緩めて着用すると、適切な締め付け時と比較して口元高さが低い
 - ・緩める幅が大きいほど、口元高さは低くなる傾向あり
 - ・緩め幅が大きい状態では、口位置が水面下になる場面もあり
- 締め付けが緩いと体が適切に浮かばず呼吸がしにくい
このため、各種ベルトを適切に締め付けて着用することが重要

○サイズが「適切なもの」と「過大なもの」の比較

- ・過大なサイズを着用すると、各種ベルトを緩めた状態では、適切なサイズの着用時と比較して口元高さが低くなる傾向あり
 - ・過大なサイズはライフジャケットが浮き上がりやすく、着用時の視界や動きを妨げる傾向あり
- 着用者の体格に合った適切なサイズのものを選ぶことが重要

○浮力体が「正常なもの」と「潰れたもの（重量物を載せたもの）」の比較

- ・浮力体が潰れたものを着用すると、正常なものの着用時と比較して口元高さが低い（重量物で浮力体が潰れたことにより、ライフジャケットの浮力が減少したため）
- 保管する際は、重量物を載せないよう注意が必要

<安全性に関する意識等について>

・購入する際に重視する点

大人用では「価格」の次に「安全性」を挙げる人が多い
子供用では「安全性」を挙げる人が最も多い

	大人用		子供用	
	所有者	非所有者	所有者	非所有者
1	価格 28.6%	価格 27.5%	安全性 29.4%	安全性 28.0%
2	安全性 25.6%	安全性 24.4%	浮力 22.1%	価格 21.6%

・性能基準適合を示すマーク等がついた商品の認知度

所有者の約 7 割、非所有者の約 9 割が存在を知らない

ライフジャケットには、性能基準をみたしていることを示すマークがついているものがある	所持者 29.0% 非所持者 11.4%
---	----------------------

<ライフジャケットに関する要望について>

・こうであれば使いたいと思う点

1	持ち運びのしやすさ、保管のしやすさ	28.6%
2	動きやすさ	25.2%
3	メンテナンスの容易さ	22.5%

・普及のために必要と思う取組等

1	購入しやすい価格のライフジャケットの普及	31.2%
2	持ち運びしやすいライフジャケットの普及	27.6%
3	ライフジャケットの貸出の推進	23.7%

9 現状と課題 (報告書 P.182~)

1 水難者数とライフジャケットの着用効果

- 過去5年間の水難者数はおおむね横ばいで推移していて、水難者の死者・行方不明者の割合が高い傾向(全国45%、東京都59%)がある。
- 統計(マリンレジャーに伴う水難者)では、ライフジャケット着用者の死者・行方不明者の割合は、非着用者に比べて低くなっている。
- 検証実験では、着用者の顔面を水面上に支持できたため、ライフジャケットの着用は、水上での呼吸可能な姿勢確保に有効と確認できた。
→ 水辺のレジャーにおけるライフジャケットの着用は、水難者の死者等を低減するのに有効であると考えられる。

2 水辺のレジャーにおけるライフジャケットの着用実態

- 実地調査等から、「水遊び」、「遊泳」、「釣り(陸上から)」などの水辺のレジャー活動でライフジャケットの着用率が低い傾向があった。また、大人の着用率の低さが目立った。
→ ライフジャケットの購入、着用の検討を促す必要がある。また、子供だけでなく、大人の着用の検討についても訴求する必要がある。
- アンケート調査から、こうであれば使いたいと思う点の上位は、「持ち運びやすさ・保管しやすさ」、「動きやすさ」、「メンテナンスの容易さ」であった。また、ライフジャケットを持たない理由の上位は、「使用頻度が少ない」、「レンタルすればよい」であった。
→ 消費者の要望を反映させ、「購入したい、着用したい」と感じるようなライフジャケットの実現を図る必要がある。

3 商品の安全性

- 消費者はライフジャケットに対して安全性を求めている一方、認証等のマークがついた商品があることを認知している人は少ない
→ 性能基準への適合を示すマーク等の認知度の向上を図る必要がある。
- 性能基準に適合した商品であっても、活動環境やレジャー内容によっては適さない場合もある。
→ ライフジャケットの選択時に注意が必要な活動環境やレジャー内容などについて周知する必要がある。

4 ライフジャケットの使用実態

- 調節ベルト等の締め付け不足やサイズ不適合などの不適切な使用事例が複数確認できた。また、ベルトの締め付け不足で脱げる可能性や重量物で浮力体が潰れる恐れがあることなどの認知度は低く、正しい着用方法や保管方法を理解しているライフジャケット使用者は多くないと考えられる。
→ 誤った着用方法や性能低下したものの継続使用を減らすため、ライフジャケットの使用者に対して、正しい使用方法等を理解してもらう取組が必要である。

10 提言（報告書 P.189～）

<着用の促進>

1 着用効果等の訴求（製造事業者団体、消費者団体、関係機関、水辺安全推進団体、国、都）

- 水辺のレジャー活動においてライフジャケットを着用する必要性について、以下のような具体的な着用効果等とともに消費者に繰り返し訴求
 - ・着用時と非着用時の口位置の差
（例：検証実験結果「着用時は、非着用時と比べて口位置が高い」など）
 - ・ライフジャケット着用で助かった事例
（例：アンケート結果「沖合に流された時、浮いて救助を待た」など）

2 準備の一般化（製造事業者団体、消費者団体、関係機関、水辺安全推進団体、国、都）

- 着用義務がない水辺のレジャー活動においても、ライフジャケットを準備するのが一般的となるよう、啓発活動を積極的に実施

3 消費者の要望を反映した商品展開（製造事業者団体）

- 購入や着用の促進につながるようなライフジャケットの実現を図るため、以下のような特徴や機能を併せ持つ商品の展開を検討
 - ・持ち運びや保管がしやすいもの（例：折り畳み式、収納用バッグの付属 など）
 - ・着用時に動きやすいもの（例：浮力体を分割配置したもの など）
 - ・保守点検が容易なもの（例：消耗部品が少ないもの など）
 - ・使用機会を増やす工夫があるもの（例：サイズの調整幅が広く共用可能、水辺のレジャー全般で使用可能 など）
 - ・レンタル向けのもの（例：高耐久、バックルなどの部品交換が可能 など）

<商品の選択>

1 性能基準適合マーク等の周知（製造事業者団体、消費者団体、検査機関、水辺安全推進団体、国、都）

- 安全性が示された商品の認知度向上を図るため、性能基準適合マーク等とその安全性能を消費者により届くように広報を実施

2 活動環境等に合わせた選択

（1）活動環境等による選択時の注意（製造事業者団体、消費者団体、関係機関、水辺安全推進団体、国、都）

- 活動環境等によって商品の選択時に注意が必要なことを消費者に周知

（2）適応する活動環境等に関する表示の改善（製造事業者団体）

- 商品情報や取扱説明書等への、推奨される活動環境等の表示を検討

<適切な使用>

1 正しい使用方法等の周知（製造事業者団体、消費者団体、関係機関、水辺安全推進団体、国、都）

- 誤った着用方法や性能が低下したライフジャケットの継続的な使用などを減らすために、以下のような適切な使用方法等を積極的に周知
 - ・ベルトの適切な締め付け具合の確認方法
（例：肩部を持ち上げずり上がらないことを確認 など）
 - ・性能低下のチェック方法
（例：浮力体の潰れや偏り、生地劣化、ベルトのほつれや切れの確認 など）

2 使用方法等に関する表示の改善（製造事業者団体）

- ライフジャケットの着用方法や適応サイズ等に関する表示について、消費者の目により留まりやすくするため、以下のような改善を検討
 - ・消費者の目に留まりやすい表示の工夫
（例：本体への印字やイラストでの図解、重要部分の強調 など）
 - ・表示項目の追加
（例：適応サイズ（身長・体重・胸囲）、着用方法（各種ベルトの締め付け方法）、保管方法（重量物を載せない） など）

3 試着の推奨（製造事業者団体、消費者団体、関係機関、水辺安全推進団体、国、都）

- ライフジャケットによって形状や各種ベルトの調節幅等が異なることから、試着した上で購入することを推奨